

# 『火ぶせの太子』

このたび太子堂修理にともない、当妙安寺に伝わるつたえばなしを紹介します。

(月刊「とも」で紹介された記事より抜粋します)



この『火ぶせの太子』伝説は、太子堂に安置されています聖徳太子の孝養像にまつわるお話です。妙安寺の孝養像は、左手に杉の小枝を持っていますが、他の孝養像では持っていません。

「なぜ杉の小枝を持っているのか？」と不思議に思ったことはありませんか！？

## このつたえばなしで分かりますよ。

猿島郡三村（現在の坂東市むむら）に、いちこくざんみょうあんじ一谷山 妙安寺という立派なお寺があります。



そのお寺に、聖徳太子の立像がまつられておりますが、これが家屋が火災にあわない守り本尊、『火ぶせ』として、ご門徒や大工さんに信仰されています。

昔からこの地方は、水に恵まれた美しい所です。利根川が流れ、沼地が広がり、肥えた土に百姓は米や麦を耕作し、静かに豊かに暮らしておりました。

村人にとって、最も困ったことは、突如として起こる戦で農地を踏み荒らされたり、焼き討ちにあったりすることでした。

そんな戦火にも妙安寺だけは燃えることはありませんでした。

ようやく、世の中が平穏になった正徳三年（1713）、その燃えるはずのないお寺の本堂に火の手が上がりました。何者かによって、本堂の裏に積んであったカヤ草（屋根ぶきの材料）に火が放たれ、あっという間に炎につつまれてしまいました。

「**火事だあ〜！**」<sup>カン</sup><sup>カ〜ン</sup>  
<sup>カン</sup>

村の人がいち早く火の見やぐらにかけ登り、半鐘を乱打しました。人々が集まった時には、火の手は高く、手の打ちようがありません。手桶をもって右往左往するだけの村の衆も、いつの間にか、へたへたと座り込み



「**なんまんだ、なんまんだ**」とただ見守るばかりでした。

そうしている間にも、火の勢いは強まり、天を焦がすように燃え上がります。

「**ああ、もうだめだ**」

誰もが、そう思ったに違いありません。その時のことです。



一人の少年が、燃えさかる火の中に入って行くではありませんか！村の人々は、わが目を疑いました。一体誰なのだろう。少年は、傍らの手桶の水をざんぶとかぶり、杉の小枝を手に持ち、天狗のような身軽な動作で駆け込みました。村の人の止める間もない出来事でした。

「**あぶない！！。。。ああ〜、なんまんだ**」

挿絵：梅田宏さん（次号に続くよ！）